文 ジャイルズ・フォーデン　写真 フィリップ・リー・ハーヴェイ

SHROUDS OF MYSTERY

時をかける秘境の滝

太古の姿を留めるベネズエラの絶景には、多くの秘密が隠されている。
それゆえに富を探しあて、あわよくば天啓までも求めようという、
恐れ知らずの冒険家たちを長年にわたって引き寄せている。

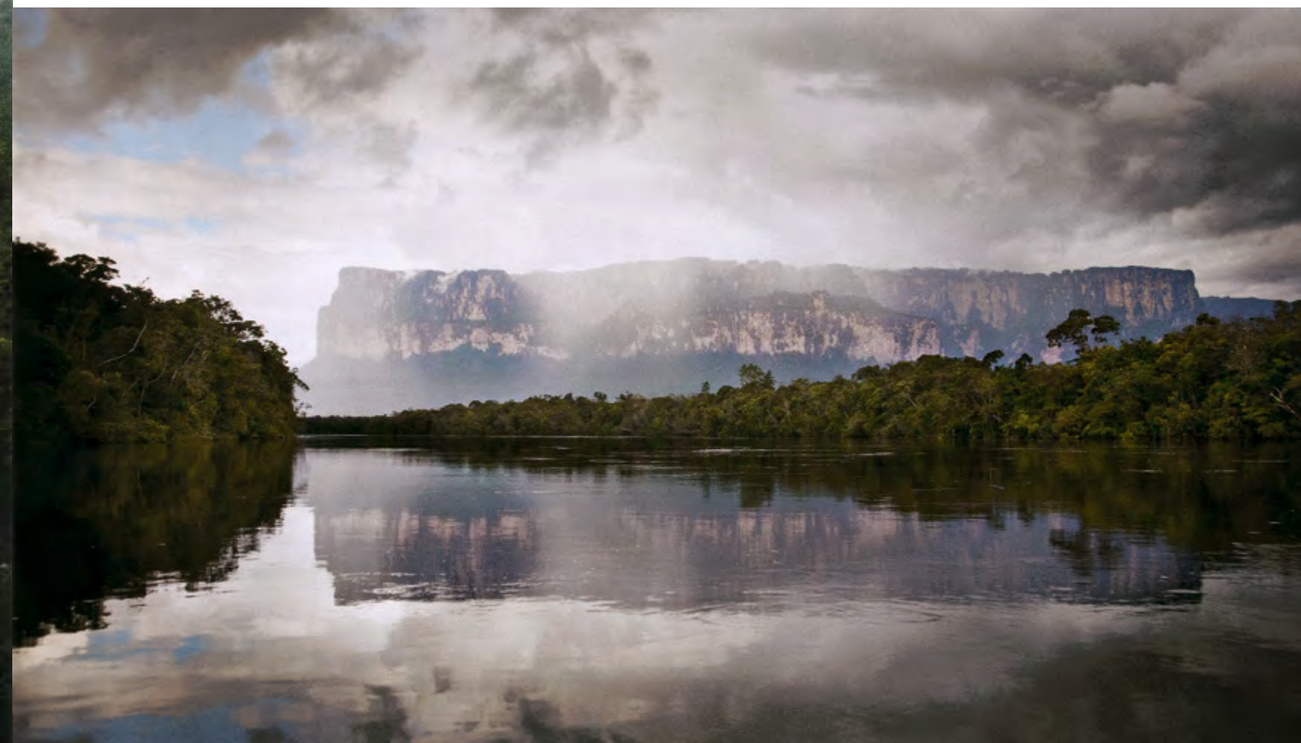
滝は永遠のなかを流れ落ちているように見えた。自分自身をふるいにかけながら変容し、空中に漂って揺らぎながらも、決してその場に留まることはない。時間の流れが遅くなり、時間が完全に否定された世界に迷い込んだかのように思えてしまう。このような印象が私の脳裏に浮かんだ理由は、理屈で説明できる。上方の水が、すでにゆっくりとした流れを見せている下方の水流を打ちながら、その速度を緩めていく状態が延々と続いているからだ。「エンジェル・フォール」は、「テプイ」と呼ばれるテーブル・マウンテンを流れ落ちていく。ベネズエラの中心部には、草原とジャングルで構成される広大なグラン・サバナがあるが、そのなかで唐突にそびえ立っているのがテプイだ。アフリカと南米がまだつながっていた1億8000万年前に、超大陸のゴンドワナ大陸が存在したといわれるが、テプイはゴンドワナ大陸が残した地質学的な特徴なのだ。私が時間の感覚を失ってしまったのも無理はない。

私は滝の反対側の岩場で、静かに呆然と立ち尽くしながら、この滝が幾重もの白濁をつくって流れ、怒号の水流に飲み込まれていくのを見つめていた。高さ989メートルのエンジェル・フォールは落差が世界最大の滝で、この「垂直の川」に幻惑を覚えたのは私だけではない。洞察のようなひらめきで、私はこの動きが、統合と分離を絶えまなく繰り返す人生のダンスのように思えてきた。そこには、たくさんの物語がある。私がエンジェル・フォールを訪れた目的は、生涯この滝に取り憑かれてやまなかった先人の足跡をたどることにあった。

神話と伝説に満ちたアメリカ人飛行家、ジミー・エンジェル（1899年ミズーリ州生まれ）。ベネズエラにあるエンジェル・フォールは彼の名前にちなむ。

飛行家かつ探検家のジミー・エンジェルは以前、アメリカで巡業の曲芸飛行士や、テスト・パイロット、映画のスタント・パイロットなどをしていたが、南米に移住してからは、もっぱら学術調査や政府から委託された探検調査のパイロットとして働いていた。彼がこの滝と出合い、その滝が流れ落ちてくるアウヤンテプイと出合った時の話は、小説の一節のようだ。それは1920年代前半に、エンジェルが立ち寄ったパナマの酒場で、J・R・マクラッケンと呼ばれる気難しい鉱山地質学者と交わした会話から始まった。この学者はエンジェルがパイロットだと分かると、5000米ドルでベネズエラの秘境を飛んでくれないか、と話を持ちかけてきたのだ。

マクラッケンは行き先を伝えず、単に方向を指さすだけだった。グラン・サバナを奥深く進んだところで、彼は大きなテプイの頭部にある草地の一角に飛行機を着陸させるように指示を出した。飛行機から降りたマクラッケンは、近くに流れる川の底をさらい始めた。鉱脈を探し当てた彼が袋に金塊を詰め込むのを、エンジェルはうっとり



と見つめていた。袋はあまりにも重く、離陸できないのでは、とエンジェルが心配するほどだった。

問もなく、マクラッケンはアメリカで息を引き取り、金塊の川がある正確な場所の情報も失われてしまった。だがジミー・エンジェルは、その場所を再び見つけ出すために余生を費やすことになる。問題の川が当時の地図に載っていなかったことから、グラン・サバナのテプイ群のなかでも辺境に位置するアウヤンテプイを流れている川に違いないと、エンジェルは思うようになった。1933年11月18日のこと、彼はこの広大な岩山の周辺を飛び回りながら、後にエンジェル・フォールと呼ばれる壮大な光景に遭遇することになる。

この滝は、実はふたつの滝、あるいは2本の水流がより合わさったものといえる。合体した水流は岩場に激突し、轟音とともに渓谷に流れ落ちていく。この時の激突により水蒸気が発生し、跳ね上がる水蒸気と降りてくる水蒸気が混ざり合う。

傾斜が緩くなり、水流が川となって森のうっそうとした緑のなかを蛇行していくと、落ち着きが戻ってくる。だが、展望台から下って、交差する木の根をまたぎ、幼木の育つ開けた空間で立ち止まってみると、木々で音が遮られているとはいえ、滝の轟音はしっかりと聞こえてくる。

私たちは、岩山の麓にある簡単なハンモックのキャンプで一泊した。山歩きでホコリまみれになっていることに気づいた私は、ひょいと抜け出して川に泳ぎにいった。急流で仰向けになっていると、上方に2頭の鷲が巨大な翼をいっぱいに広げながら、空を徘徊している。さらに上方ではアウヤンテプイの険しい輪郭が広がっている。

900メートル下からでも、岩の細い隙間から滝が押し出されるスポットを目撃できる。その延長上に私が今横たわっている水があるのだ。こうして見つめている間に、そびえ立つテプイが陰鬱な紫色のモヤを帯び始め、霞と雲のベールを引き寄せながら、あたかも夜に備えているかのようだった。

翌朝、モーター付きのカヌーに乗って、エンジェル・フォールの飛び込みポイントであるカナイマ・ラグーンへと向かった。到着までに4時間を要したが、地元ペモン族の有能な操縦士は岩や土砂崩れを注意深く避けながら、フルスピードでカヌーを走らせた。その間、熱い直射日光が射したり、土砂降りになったりを何度か繰り返した。テプイの存在が天候に大きな影響を与えているのだ。

カナイマにある小さな集落には、周辺のテプイから流れる水が集まり、サポ滝にある巨大な崖の隘路に流れ込む（ペネズエラは本当に滝の多い土地なのだ）。そこでは泳ぐことも可能で、波打つ水辺に立つ2本の椰子の木が壮大な玄関口となっている。

私はカナイマの飛行場で小さな飛行機に乗り、グラン・サバナ奥地にあるカバクという僻地のキャンプに向けて飛び立った。途中、パイロットは波打つ草原の上空を飛びながら、地元の新聞を読んだり、保護用の黄色い布巾でくるんだGPS測定器に時おり目を向けたり、白いものが混じった口ひげを無線機に押しあてて話し込んだりしていた。

当時GPSが存在していたら、ジミー・エンジェルは金塊の川を再び発見することができただろうか。いや、当時の古い飛行機にも緯度経度の表示が付いていたではないか、コンパスなどの計器があれば、再び発見できていたはずではないか、と考える人もいるだろう。彼は操縦する単葉機「1929年式フラミンゴ」をカロニと名づけた。これは彼がグラン・サバナを飛行する時に、目印としていた主要河川の名称だ。だが、空中からグラン・サバナの全体を見渡し、アウヤンテプイの壮観を目の当たりにしてしまうと、たとえ計器や優れた操縦感覚があったとしても、方角感覚が簡単に失われてしまうことが分かるはずだ。

さらに、そこから戻れたとしても、誰もその話を信じてくれなかったらどうだろう。1933年の秋頃にエンジェルが最初の飛行から帰ってきた時、周囲の人は作り話に過ぎないと思い込んだ。グラン・サバナにはカマラコト族など先住民のペモン族が住んでいるが、外部には全くと言っていいほど知られていなかったのだ。

4年後の1937年10月9日、エンジェルはカロニ川にある滝に戻った。その日、飛行機に同乗していたのは妻のマリー、威勢のいいペネズエラ人探検家のグスタボ・エニー、彼のアシスタントを務めるミゲルの3人だった。飛行機はエンジェルが着陸を狙った草地をかすめたものの、次の瞬間にやわらかい地面とぶつかり、頭から突っ込み、鼻先とプロペラが泥地に埋まってしまった。幸いなことに、この小チームは事故の可能性を想定し、装備は十分に用意していた。疲労困憊のトレッキングを経たものの、備蓄の食料、ロープ、テント、マチェーテと呼ばれる刀などのおかげで、12日後には近場の集落に到着し、そこでカマラコト族の人たちに助けられることになった。

それ以来、エンジェルの探険活動といえば、滝の「発見」に関係するものとなった。カマラコト族にとっては、アウヤンテプイのアウヤンは「悪魔」、テプイは「家」を意味するなど、天地創造神話の一翼を担う。エンジェル・フォールという名称に関しては、2009年にベネズエラのウーゴ・チャベス大統領がこれを「ケレパクパイ・メル」に変更するという意向を発表した。この名前は現地先住民が使用している言葉で「最も奥地にある滝」を意味する。しかし同大統領は後日、名称変更を法律によって規定することはないと発表した。大多数のベネズエラ人は、今日もこの滝を「サルト・アンヘル（エンジェルの滝）」と呼んでいる。

着陸してみると、カバクは多くのカマラコト族が住むカマラタ村に近いことが分かった。ひっそりとした集落を取り囲んでいる椰子の木林のなかを地元ツアーガイドのジョージと歩きながら、先住民文化について話を聞いた。「ジョージというのは私の本名じゃないんです」と彼は言う。「カマラコト族の名前は、旅行者の方には発音するのが難しいので、そう名乗っているのです」

主に移民や病気、伝統継承問題などで、カマラコト族とその上位グループのペモン族は文化的アイデンティティの危機に瀕しているのだ、と彼は大筋を語ってくれた。「私たちはこの『モリチェ』という椰子を『命の木』と呼んでいます」と話しながら、家屋のひとつに私を招き入れ、椰子の葉でつくられた籠、靴、屋根などを見せてくれた。

ジョージは、ジミー・エンジェルが不時着した時に、一行をテプイから連れ出す手助けをしたペモン族の人と話したことがあるという。エンジェルの不時着機はアウヤンテプイで放置されたままだったが、30年後、ついに文明に帰されることになった。機体は解体されて運び出され、今や完全な修復を受けて、ボリビア市空港に鎮座している。

私はジョージと一緒にカバク渓谷を登った。気温が高く、消耗の激しい行程だった。だが、滝が急流の谷川に合流するカバクには、尋常ならざらぬものがある。エンジェル・フォールは、垂直に流れ落ちてくる水の速度が途中で連続的に変化する。これは平地を流れる急流で見られる、水流の変化を手に触れるように感じさせる。

深く冷たい淵でリラックスしていた

（右）カバク渓谷の細長い亀裂。
（上）カナイマ国立公園のロライマ山が見せる興味深い曲線。
［前見開きページ］エンジェル・フォールがあるアウヤンテプイでは、空の色合いや雲のパターンが刻一刻と変化し、気まぐれな表情を見せる。

ロライマ山は
カナイマ国立公園で最も
高いテプイ。ガイアナ、
ベネズエラ、ブラジルの
3つの国境の接点に
横たわっている。

かと思うと、その直後には、水流で細い裂け目に引きずり込まれないように、ロープにしっかりとしがみついている私がいた。滝のすぐ近くには、後ろ向きでしか接近できなかった。突き刺すようなしぶきには活気があったが、そこに長く立っていられるのは自虐趣味のある人だけだ。さあ行こう、という時に、私は足を滑らせ、あたふたと水路の後方に流され、再び遊泳用の淵に入り込み、崖から垂れ下がっているツル植物を見上げる羽目になってしまった。

再び乗り込んだセスナ機から降りると、私の旅はクライマックスに近づいていた。これからヘリコプターでロライマ山を上昇していくのだ。この山はベネズエラのメサ（岩石丘）のなかでも絶妙の壮観を誇り、そのむき出しの崖と鉄床のような高台は、コナン・ドイルの小説『失われた世界』や、それを現代に再現させた映画『ジュラシック・パーク』シリーズにインスピレーションを与えている。ロライマの岩塔はブラジルとガイアナの国境をまたぎ、荘厳な風格で雲の間にそびえ立っている。

恐ろしい急降下をしながら、ヘリコプターは岩の前面付近を巡回し、ガタガタと揺れながら沼地の砂の上に着陸した。下降気流に身をひるませながら辺りを見回すと、ここが隔絶した特殊な場所であることがすぐに見て取れた。黒い玄武岩がむき出しの歯のように突き出し、シダ、ラン、アナナスといったテプイの高台に生息するあらゆる異様な植物が、あたかも別の惑星であるかのような、あるいは有史以前の地球であるかのような印象を与えている。

私はロライマにある「ホテル」に宿を取ることになった。頭上にせり出した岩が屋根のように、時として無情な天候から身を守ってくれる。そこでは岩陰から恐竜の首がヌッとあらわれることも十分にありそうだった。そして、人間の時間の尺度から超越した場所に自分はいるのだ、という感覚に再び襲われた。ここでは、私たちは物語のなかの芥子粒に過ぎないのだ。

アレパ（とうもろこし粉のパン）とコーヒーの朝食をとり、ヘリコプターで山を降りることになった。ジミー・エンジェルが経験したようなマラソン行程ではなかったが、それでも、現代の冒険家にとっては十分な、困難を伴う旅だった。洪水、飛行機の遅れ、そしてチャベス体制下の厳しい情勢を示す、軍隊や破壊された建物。そんなことはエンジェルが知るよしもない世界だろう。彼は川の流れを頼りに、小さな飛行機に飛び乗る自由だけを知っていたのだから。

エンジェル・フォールを訪れてしまった今、ジミー・エンジェルが取り憑かれていた物語に、すっかり飲み込まれてしまった感がある。彼は金塊の川を見つけることはなかったが、実は今でもそこからあまり遠くないところにいるのかもしれない。エンジェルが亡くなった1959年――パナマに着陸した時の頭部負傷が原因だったが――から4年後のこと、妻のマリーは本人の希望通り、彼の遺灰をエンジェル・フォールに散布した。